

冬の 幼児の生活指導



永山 暁美

現在、日本のおとなの公衆道徳の貧弱さ、身勝手さを恥ずかしく思うことがあるたびに、幼児期に幼稚園生活から得た生活指導が、将来までも大切な宝として、失われなくてほしいと願わずにいられない。

「おとなになったら、立小便してもいいんだね」

『おれ』とか、『おめえ』っていうのは、お父さんやお兄さんが使うことばでしょう。だけど、私達は使っちゃいけないのね」

「道の真ん中じゃなかったら、ごみを捨ててもいいって言ってた

よ」

などという会話を耳にして、幼児はおとなの矛盾をそのまま承認していることを思うと、私達は、もっともっと細心の注意を以て、幼児に接しなければならぬと思う。

お正月も過ぎ、冬にもなれたこの頃であるが、冬に対する生活指導はこれでよいだろうか。三学期ともなれば、嗽、手洗い、持物の整理、順番を守る、独占しないで分け合う、些細なことに泣かずにことばで言う、集団の一員として自分を抑えることができる、というような、基本的な生活態度は或る程度できてきた。何事も、自分でできる事は、自分でやりたいという逞しさも見られる。

しかし、冬になると、朝出がけの時間が足りなくて顔を洗わなかったり、水が冷いので、手を十分に洗わない為、度重なると鱗のような手になったり、ひびが切れたりする幼児もあるので、注意しなければならぬ。

冬に入って最も心配なのは、幼児の健康であるが、「今年は悪性の感冒が流行しませんように」と祈る気持になる。秋に鍛えて蓄えた体力を以て、寒さを克服しなければならない。「風邪は万病の源」というからには、万全の注意はしなければならないが、健康な幼児は寒さを少しも苦にせず、ますます活動的である。それよりも衣服を重ね過ぎて、体が自由にならない方がよほど、苦勞であろう。冬になると、よもやと思う男児が、大便の粗相をすることがある。取

り替えてみると、吊り長ズボンである上に、ズボン下、毛糸のパンツ、下ばき、それが、上着やシャツと交互に重なり合っているのは、不可抗力の粗相とも言えよう。

また、袖のあたりが、四枚にも五枚にもなっていて、むつくりしていは、鉄棒あそびなどする気にならないであろうし、それが毎日続けば、動作ものろく、運動も不足になるわけである。保育者は、その時、その幼児の様子をよく観察して、口に出して言わない幼児の体の要求を早く発見し、適切に処置してやりたいものである。

登園後、間もなく霜の白さをものもしない元氣者が、ぶらんこ目がけて走って行き、やがて頬を赤くして得意気にぶらんこから呼びかけている。一しよにバスから降りたお友達が、外套を脱ぎ帽子もかけ、鞆をおいて、連絡物を先生に渡したり、嗽をし、手を洗って庭をのぞく頃には、もう遊びが酣になっている。

「朝寒くても、ぐずぐずしないで元氣よく起きましよう」

「洋服や靴下も、できるだけ自分で着ましよう」

と、いつもお約束を繰り返しているが、この幼児達はきつと、お約束をよく守れたのであろうと思う。

いつも、室内で、トラックや組木・積木をしていたり、ままごに飽きることはない人達にも、「冬のお日様の光は柔くて、とてもいい気持よ」と庭に誘い出せば、少し位冷たい風が吹いていても、空は高いし明るいし、やっぱりよい気持である。

三才児のまるまるとした体や手が、砂場一ぱいに動いている。ぶらんこや、滑り台や、ジャングルや、鉄棒に、三、四人ずつ遊んでいるのには、四才児もだいたい見える。探偵ごっこなど、庭を狭しとかけ廻っているのは年長組である。大勢の人垣は渦巻遊びで、いろいろな級の幼児が入り混って並んで見ている。遊園塔を使って鬼ごっこや、縄とびなどしているのは年長組の女児らしい。おやおや、先生も乗せている超満員の電車に、またひとり乗り込もうとして大騒ぎである。「〇〇の組、お集り」とどこからか声の湧き起ってゐるまでの朝の庭は、いつ果てるともない、生々とした楽しい遊びの時間が流れていく。

温室きながらに、ごぎを敷いて、ガラス戸の向うでままごことや、絵本よみをしている所を覗いて見れば、ごちそうの積木や石を塗ったものなど、だいたい散らかっているようである。そろそろお片付けの時がきたようだ。

庭の遊具を始末して、手洗い、用便、鼻をかんだり、室内の整理を手伝ったり、一しきり忙しい。終の人は、お手洗所の戸や室の戸を閉めることを忘れないように。

この頃、つくづくと幼児の朝の遊びの大切さを感じる。登園後すぐに、自分の友達と、遊びを見つけれられる幼児は幸である。遊びに入る前の幼児を、よく見究めなければならないと思う。それに比べ、昼食後の幼児の遊びは、あまり注意・誘導を要せずに、誰もが自然に遊びに入れるような気がする。

木枯らしの強い日、雨や雪の降る日、幼児達はやむなく室内や廊下で遊ぶ。元気のよい子は、遊戯室に行つて、大積木や、平均台や、マットで角力の仕合いなどをして遊んでくる。反古紙の「飛行機の紙」が無くなったと言いに来る幼児があるが、かなり用意してあったはずだから、ひとりで一枚ずつ使うお約束が守れなかつたようである。「トラックを〇〇ちゃんずいぶん使っているのに、僕に貸してくれないよ」。「玩具は、代り番こに使うお約束ね」「もう代りう」。

ずいぶんよくわかるようになったと、遊んでいる姿を嬉しく眺める。大声を出さないように、使つた紙屑を散らさないように、廊下は走らないことなど、こんな日にはつとめて指導する。自由画帖を出して、おえかきしている人達には、説明を書き入れながら、背中が曲らないように注意して歩く。ポケットに両手をつっ込んでお友達遊びを見たりする幼児には、そのまま若し転んだらどうなるか、皆と考へてみるようにする。幼児達は、このお天気に対して、すべて目の前に起る新しいことをも、不服を感じないで、いつもそれを迎え、適応していくので、おとなも大いに学ぶところがあると思う。

たいていのおとなは冬を敬遠する。寒いので何かと仕事がしにくくなる上に、忙しい事がたくさん控えているからであろう。しかし

幼児は、冬とも仲好しである。せんだつて「冬と夏と、どちらが好きか」をひとりずつ話し合つたことがある。

四才児四十名であつたが、ちょうど、半分ずつに軍配が上つた。幼児の冬の好きな理由は次のようであつた。

「お炬燵や、ストーブがあるから」

「クリスマスとお正月があるから」

「雪が降つて、雪だるまを作つたり、スキーをして遊べるから」

「霜柱をふんだり、水溜りの氷をふむのがおもしろいから」

「かるたや、すごろくなどして皆で遊べるから」

楽しい冬のお話に、皆は一つひとつ瞳を輝かせて賛成する。こんなにたくさん、嬉しいことがあつて幼児の世界は羨しいと思う。私達もまた、幼児と共に過ごしているおかげで、健康で、張り合ひのある冬である。

×

×

この幼児達がおとなになつて、誰もがよい生活習慣・社会道徳を持ち、その子ども達のお手本として恥ずかしくない時代がくることを楽しみにしよう。その頃は日本も世界の国々と仲好く交わり、良識ある日本人を誇れる日がくるのを信じたいと思う。

(洗足学園幼稚園)

* * *